実践的自治会町内会論（前編）

# ここに生き続けられるために

福井県大野市和泉地区　和泉自治会会長　辻 善範

平成21年から自主団体による花桃の植樹が始まり春にきれいな花をつける

## 第1章　和泉地区の概要

和泉地区（旧和泉村）は、福井県の東端に位置し、岐阜県に隣接しています。面積は約332㎢で、約9割が山林であり、四囲山脈を形成し、その中央を岐阜県境に源を発する九頭竜川が東西に貫流しています。また、九頭竜川をせき止めた九頭竜ダムを初め、大小複数の人造湖を形成しています。

●人　　口　430人（31,258人）
●世 帯 数　220世帯（11,618世帯）
●面　　積　332㎢（872.43㎢）
●人口密度　1.3人/㎢（35.8人/㎢）
※令和4年7月1日現在　（　）内は大野市全体

大野市和泉地区の概要

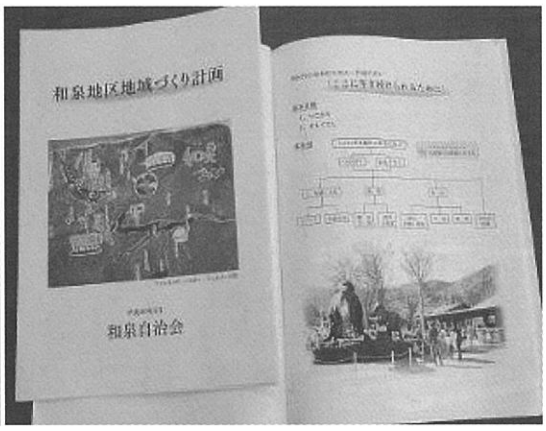
和泉地区の人口は、旧和泉村時代の昭和40年は5723人でしたが、昭和43年の九頭竜ダム完成や昭和62年の中竜鉱山採掘中止などが影響し、年々減少して、平成17年の大野市との合併時には729人、約17年が経過した現在（令和4年7月1日）では430人まで減少しています。

このような中、旧和泉村では、地域の特性を充分に生かしたむらづくりの理念のもと、観光と農林水産等地域の連携による内発的地域振興を目指してきました。

## 第2章　和泉自治会設立と「和泉地区地域づくり計画」の策定

平成17年11月の大野市との合併を契機に、これまで旧和泉村が主催していた体育大会

集落説明会の様子




和泉地区地域づくり計画

や敬老会など地区のイベントを、和泉地区で自ら継続していくため、平成18年に和泉自治会を結成しました。

和泉地区は、大野市街地から約30㎞の距離があり、行政サービスの低下や人口減少、高齢化や若者の流出が進み、限界集落も複数存在しています。そのため荒廃した土地の増加、特産物の生産量の減少、後継者問題など地域力・マンパワー不足による地域の衰退、さらに経済情勢の悪化などによる観光客の減少など、和泉地区の将来への不安が増大していきました。

そのような危機感の中、地区の課題を踏まえ、将来について考え、行動を起こしていくことが大切であると考えました。そこで、まずは地区住民が将来のこと、困っていること、地区の良いところ・悪いところなど自由に意見交換をする場として「和泉で語ろう会」を平成24年7月より開始し、運営を担当する企画会議や定例の自治会総会・役員会に加え、臨時総会等を随時開催し、平成26年4月には「ここに生き続けられるために」を地区住民の基本的な考え・共通の思いとした「和泉地区地域づくり計画」を策定しました。

計画案策定後は、集落説明会を7ケ所で開催し、地区住民に周知を図り賛同をいただきました。

〈策定までの経過〉

・和泉で語ろう会…平成24年7月31日～平成25年9月24日　9回開催
・企画会議…平成25年2月19日～平成26年1月20日　12回開催
・自治会総会…平成24年度1回、平成25年度3回（臨時総会含む）
・自治会役員会…平成24年度4回、平成25年度3回
・集落説明会…平成25年12月8日～平成26年1月25日　7ケ所

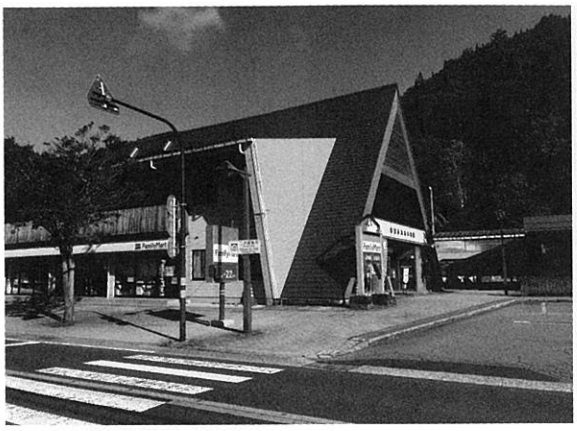
## 第3章　地域づくり活動

計画策定後は、計画推進部会として、生活チーム、産業チーム、人・伝統チームの3チームを組織し、地域課題解決に向けて活動を始めました。当初は、区長や各種団体長を中心にチーム編成をしましたが、今では自主的な参加をする方や、興味のある方の参加をいただき、精力的に活動しています。

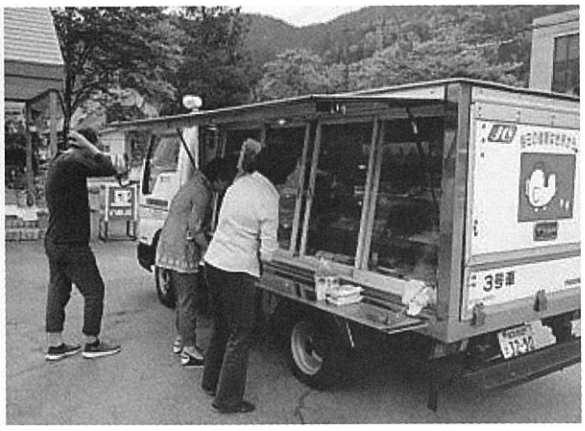
各チームの主な取り組みを、ご紹介します。

### ■「生活」チームの取組

○日用品を販売する店舗がなくなった後の生活の不便を解消



コンビニエンスストアを誘致



移動販売車での買い物

和泉地区で唯一の日用品を販売する商店が平成26年末に閉店し、地区住民が食料品等を購入するには、約30㎞離れた大野市街地または岐阜県郡上市まで行かなければならなくなりました。これを受けて生活チームでは、地区住民の日常生活の利便性を少しでも向上させるため、これまでも毎週金曜日に移動販売を行っていた市内精肉店に加え、福井県民生協にも依頼し、毎週月曜日に移動販売車を派遣してもらうこととしました。この2社は、平成30年の豪雪の際、物流がストップする中、市内精肉店は移動販売を継続し、福井県民生協は支援物資を送るなど、和泉地区を支援し、住民の生活にとってなくてはならない存在となっています。

また、地区内での日用品を購入できる店舗がなく不便との声に応えるため、地元企業と共に、コンビニエンスストアの誘致にも取り組みました。誘致活動の結果、地元企業がコンビニの運営を担うことになり、令和元年度に約4年ぶりに地区内で日用品を購入できるようになりました。地区住民はもちろんのこと、現在工事が進められている中部縦貫自動車道の工事従事者からも大変重宝されています。また、観光客などの多くの方にも利用されています。

○地区電話帳の作成

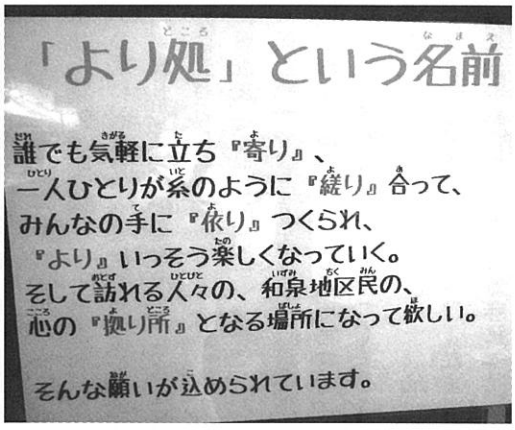
生活している中で、誰に相談し、どこへ連絡すればいいのかわからないということを解消するため、区長や民生委員、診療所、和泉支所（現在は和泉地域交流センター）、公民館などの公共施設、各商店や事業所など和泉地区独自の電話帳を作成し、全世帯へ配布しました。また、緊急時にはあわてず通報できるよう連絡方法を大きく記載しました。和泉地区電話帳は全世帯に配布し、各家庭などで活用されています。

○全住民にマスクを贈ろう

令和2年、新型コロナウイルス感染拡大

手づくりマスク

「より処」日常の様子




「より処」とは

でマスクが品不足で購入できず、県の購入券や市からの配布がまだ実施されていない時期に、外出自粛の中でお互いに助け合えることとして、マスクづくり活動を呼びかけました。この呼びかけに、すぐに20名余りのボランティアが集まり、各家庭でマスクづくりに取り掛かりました。10日ほどで5色の手づくりマスクが仕上がり、出来上がった500枚のマスクを全住民に配布しました。

○「より処（よりどころ）」の開設、運営

平成28年9月に、和泉地区で活動していた緑のふるさと協力隊員の発案で、生活チームが中心となり、空き店舗を活用して、毎週水曜日に、飲み物、地元・季節の食材を使用したランチを地区の女性グループが提供する交流の場を創出しました。この「より処」は、人が集まる場所、地区の話題が集まる場所となっており、会話の中から和泉自治会で新たに取り組むべきものが見つかることもあります。

また、月に一度、和泉診療所と連携し、「運動プラスデー」として医師や保健師などによる健康づくり講座や、「健康プラスデー」として体脂肪や筋肉量などの測定を行っています。毎月の測定で住民の健康に対する意識向上にも一役買っています。

令和元年度は新たな取り組みとして、より処から離れた集落に住む高齢者も訪れることができるよう、バスを運行してより処に立ち寄ってもらうとともに、コンビニで買い物を楽しんでもらう取り組みも行いました。

現在も毎週水曜日には高齢者を含め地区住民が集い、おいしくランチを食べるなど楽しい時間を過ごしています。利用者は、平成28年度に開設し、平成29年度は882人だったのが、令和3年度では1，345人まで増加しました。

○和泉地区空き家バンク

和泉地区においても、少子・高齢化や若者の流出などにより、空き家が増加しています。この空き家を武器に、移住者を受け入れられるよう希望者に空き家情報を提供し、現地案内を通して住民の人柄や地区の事情を事前に紹介し、安心して移住できるよう、移住希望者と空き家、地域を結びつける空き家バンクを目指しています。

まだ登録数は少なく、マッチングはありませんが、多くの方に活用いただけるよう情報収集・整理、ホームページなどの発信を行っていきます。

（後編に続く）